

外界との係わりの微弱な盲重複障害幼児との初期的係わり合いに関する事例的研究

中村 友亮

．問題

柿澤ら(2002)は、2000年度「全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等の実態とその推移」の調査結果より全国盲学校での重複障害をもつ児童生徒の割合は漸次増加傾向にあると述べている。中でも幼稚部の重複障害をもつ児童生徒の割合は幼稚部全体の中で6割弱にも及んでいると述べている。

視覚障害がある場合は、乳幼児期においては特に移動能力および表象形成に関して困難を生じさせる。さらに母子との関係においては、身体接触や声かけを重視しつつ養育を行っていくことが重要であると考えられる(Fraiberg,1977)。

だが、これらの点での配慮が不十分な場合、Blindismと呼ばれる常同行動が現れ、視覚障害をもつ乳幼児の発達に影響を与える可能性がある。

橘(1978)は、このような常同行動を考察するに当たっては、常同行動以外の行動でいかに外界に係わり、その係わりが常同行動といかなる関連をもつかを追求する姿勢が必要であると述べている。

梅津(1976)は、生体には生活活動の途上で生体内外に変調をきたした場合、その変調を適度の調子に戻すようにする「調整の活動」のはたらきがあるとしている。そして、「緩衝行動」は行動を持続していく過程で生じる動揺を緩和する働きがあるとしている。

これらのように、障害児が示す常同行動を外界との関わりから検討する場合、子どもの外界との相互交渉の姿から考察していくことが必要と考えられる。

特に、視覚障害以外にも障害をもつ重複障害の子どもが係わり手と初めて係わり合う場合では、その係わりの在り方は、子ども一人一人で異なると考えられる。

．目的

本研究では、常同行動を示す、外界との関わり

の微弱な一人の盲重複障害幼児を対象として教育的係わり合いの実践を進め、その臨床的資料から、以下の点を検討する。

- 1.常同行動を示す盲重複障害幼児が係わり手を含む外界とどのように関わっているのかを検討する。
- 2.常同行動を示す盲重複障害幼児との初期的係わり合いのあり方について検討する。

．方法

1. 対象児

女兒R(係わり開始時5歳1ヶ月)、レーベル先天性黒内障(全盲)。盲学校幼稚部年長クラス在籍。

2. 実態の概括と教育的係わり合いの方法

活動の停滞時や周囲からの働きかけが無い時には、緩衝行動と考えられる髪飾りを手で叩いたり、耳に手を当てる常同的な動きがみられた。また、激しく泣く等する粗大な調整(梅津,1976)が強く現れ、係わり手や周囲の事物と関係をつくることに難しさがみられた。

だが、好きな音楽や、身体の揺れに手足を動かして喜びを表現する等、感受性は豊かに持ち合わせていることが認められた。また、這い這いの動きは見られないが、座位や伏臥位の状態から触れなれているタンバリンやカスタネットに自発的に手を伸ばす動きが認められた。

よって、音楽を主に用いた働きかけにより、Rの外界からの刺激の受容が拡大するよう活動内容を設定し、外界への能動的な動きを促すこととした。Rとの係わりは盲学校幼稚部教室にて、2004年4月から2004年7月(5歳1ヶ月～5歳4ヶ月)まで行った。

3. 資料収集および分析の手続き

- 1) Rと係わった場面をビデオ撮影し、一次資料として用いた。

2) 1)を基に、Rの行動をNとの係わり、外界との関わりの点から、外界への能動的な動き、常同的な動きを中心に生起状況を頻度、時間から把握する。

3) 2)の結果から外界への能動的な動き、常同的な動きに関して特徴的であると考えられるセッションを抽出する。そして、梅津(1976)を援用し行動図を作成し、Rの外界との関わり、Nとの係わり合いに関して検討する。

結果

1. バランスボール(以後BBとする)での活動(18セッション実施)

Rを伏臥位でBBに乗せ、背中をもって揺らす「歌と揺れの時間」と、背中をもって揺らさずにRの自発的な動きを待つ「お休み時間」の2つの時間を交互に行った。

そして、「歌と揺れの時間」では、体を揺らすことと共に様々な歌いかけを行い、「お休み時間」では、Rの自発的な動きに歌いかけ等で応答していくこととした。

活動経過全体の行動状況では、手叩きや笑顔が増えるに従い、髪飾りを叩く、耳に手を当てるといった常同的な動きが次第に減少した。さらに、BBを叩く、BBをひっかくといった外界への能動的な動きが増加した(図1)。

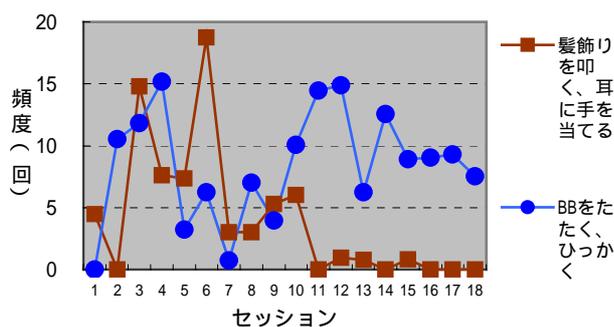


図1. 「お休み時間」の髪飾り・耳に手を当てる、BBを叩く・ひっかく動きの頻度(回/600秒)

2. 探索的な手の動きを引き出すことを狙いとした活動(10セッション実施)

Rが椅子に座った状態で机の上に教材を3つ配置し、音楽と共に歌いかけたり、教材を鳴らしたりする等してRの教材への動きを促すこととした。

そして、輪ゴムを張ったティッシュ箱を主に使用し、6種の教材を3期に分けて活動を行った。

当初、両手を背中にまわす回避的な動きや、常動的な動きを示していたが、次第に流れている音楽に手たたきと共に笑みを示すようになり、教材への手指での働きかけも増えるようになった。

活動経過全体での行動状況では、活動が進展するに従い、教材への働きかけが増加し、両手を背中にまわす回避的な動きが減少した。また、机上の教材に手指で働きかける動きがティッシュ箱を中心に増加した(図2)。

さらに、抽出したセッション3場面中での教材に手指で働きかける直前の行動は、常同的な動きの占める割合が減少し、静止している状態が増加する結果となった。

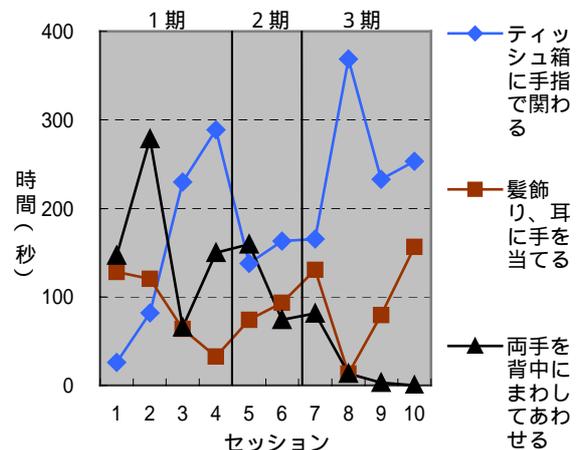


図2. ティッシュ箱に手指で関わる、髪飾り・耳に手を当てる、両手を背中にまわして合わせる時間(秒/900秒)

3. 目的的な手の動きを引き出すことを狙いとした活動(11セッション実施)

Rが椅子に座った状態で机の上に教材を配置した。その中でカスタネットを主に使用し、4種の教材で4期に分けて活動を行った。

当初、探索的な手の動きを引き出すことを狙いとした活動と同様に、回避的な動きや常同的な動きを頻繁に示していたが、次第に音楽に笑みとともに手叩きを示すようになり、カスタネットへの働きかけが増えるようになってきた。そして、活動第3期では、机上の2つのカスタネットに交互に手で働きかける動きも現れた。

活動経過全体での行動状況では、活動の進展に従い常同的な動き、回避的な動きが共に減少した(図3)。その過程で、笑顔、手たたきといった情動的な動きとともに、教材への働きかけも増加した。

また、抽出場面中での教材に働きかける直前の行動では、常同的な動きが減少し、静止している状態の割合が増加する結果となった。さらに、手を叩いたり、体を揺らす動きが現れるようになった。

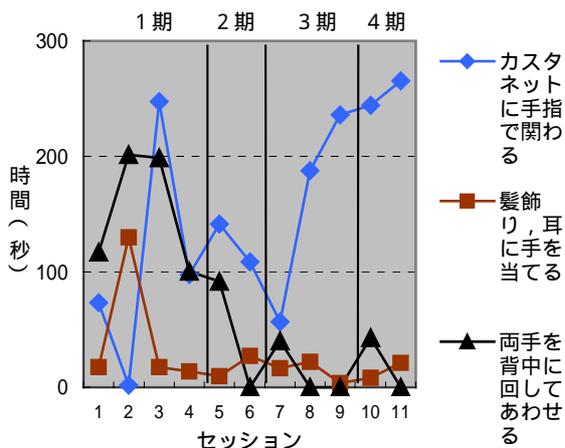


図3 . カステネットに手指で関わる、髪飾り・耳に手を当てる、両手を背中に回して合わせる時間(秒/900秒)

考察

BBでの活動での「お休み時間」の行動は、笑顔が増加するにつれ、手を叩いたりする等の情動表出とともにBBをひっかくといった外界への動きが促される結果を示していると考えられる。Rにとって、能動的に受容できる「歌」や「身体の揺れ」といった働きかけによって、快の情動が生み出され、外界への能動的な動きを促す結果となったと考えられた。さらに、髪飾りを叩く、耳に手を当てるといった常同的な動きが、係わり手であるNとの係わりが進展し、笑顔が安定して増加するにつれ減少する結果となったことから、これらの行動は外界からの刺激による自己の変調を緩和する「緩衝行動(梅津,1976)」と考えられた。また、Rにとっては、情動的な安定が外界と関わる上で不可欠であることを示していると考えられた。

探索的な手の動きを引き出すことを狙いとした

活動、及び目的的な手の動きを引き出すことを狙いとした活動では、常同的、回避的な動きが減少するにつれ、机上の教材への動きが増加した。また、教材に関わる直前の行動では、静止した状態から教材に手指で関わる動きへの変換が増加する結果となった。

これらのことから、Rが外界のモノと関わるためには、まず周囲からの働きかけを安定して受容できる状況設定が必要であると考えられた。そのためにも、また、そこを土台としてモノと能動的に関わるためにも、楽しさ、うれしさといった快の情動が必要と考えられた。

よって、Rは新奇な人やモノと対した時は緩衝行動や回避的な動きがともなう調整状態が優位となりがちであるが、これらの行動によって自己に生じた変調を緩和しつつ、快の情動が係わり手との関係に生じるに従い、外界への能動的な動きを見せるようになると考えられた。したがって、盲重複障害児との初期的係わり合いにおいては、子どもの情動の安定をはかり、楽しさ、うれしさといった快の情動を高めるよう聴覚的、触覚的な働きかけを重視して働きかけていくことが重要であると考えた。

今後の課題

常同的な動きを示す、盲重複障害児の外界との関わりを、活動場面以外を含めて把握すること、また、外界への能動的な動きを促す係わりのさらなる検討が必要であることが挙げられた。

引用文献

Fraiberg,S(1977) Insight from the blind: Comparative studies of blind and sighted infants. New York Basic Books, Inc.

柿澤敏文・香川邦夫・中田英雄・鳥山由子・池谷尚剛・佐島毅 (2002) 全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等の実態とその推移 - 2000年全国調査結果を中心に - . 筑波大学心身障害学研究,26,163-175.

橘英弥(1978) 常同行動の考察 - 障害児を中心に - . 心理学評論, 21(1), 38-54.

梅津八三(1976) 心理学的行動図. 重複障害教育研究所研究紀要, 創刊号, 1-44.